

序……………生活の美学——生き方のスタイル、生活のデザイン

世の中には自分の生活スタイルにこだわりを持っている人がいる。わざわざ放浪生活をしたり、端の欠けた食器でご飯をたべたり。うっかり友人が「安いアパートを紹介しようか」とか「新しい食器をあげようか」などと言えば、「これが俺の美学だ」「この風流な味がわからんのか」と怒られる。「いやあ、そうだよね」とか言って引っ込むしかない。どうやら「美学」や「風流」といった言葉はそのような、あえて便利だの快適だのを無視した生活のスタイルを指すことになっている。

「の美学」という言葉をネットで検索すると、「男の美学」、「敗者の美学」、「無駄の美学」などが出てくる。私もいちおう美学研究者のはしくれなので断言するけれども、美学の学会でこういう言葉が使われることは絶対にならない。専門用語の「美学」は哲学の一分野であって、自然美とか芸術とかを対象に考察を行うものである。専門家からすると、世間は「美学」を誤解している、ということになる。

たしかに美学という学問はひどくマイナーなので、世間に正しく理解されていないのは仕方がない。けれどもその言葉の使い方に一定の傾向があるのを見ると、どうやら世間は「美学」を誤解したのではない。初めから理解する気などなく、勝手に独自の意味を与えてしまったようだ。それは身の処し方において、物の作り方において、経済性や合理性ではなく「美しさ」を基準とするという態度のことである。つまり「生き方のスタイル」とか「生活の中のデザイン」という身近なものを指すために「美学」という言葉が採用されたのだ。それはたぶん「美学」という言葉が、日本語の体系の中で欠落していたあるピースを埋めるのにちょうどよかったからだろう。「美学」は便利

な、いや必要な言葉だったから広まったのである。

では世間はなぜそのような「美学」という用語を必要としていたのだろうか。私たちがじっさいの生活の中で、経済性でも合理性でもない基準で判断を下すことがよくあるからだ。しかもそこには何らかの一貫した原理が働いているように見えるからだ。たとえば私たちは「きれい」という言葉を、人の容姿について（「きれいな人」）だけでなく、人の振る舞い方についても（「きれいなやり方」）、物品の外見についても（「きれいな形」）、さらには空間の清潔さについても（「きれいな部屋」）用いる。また反対語である「きたない」も、人の行為や人格（「きたないやり方」「きたない奴」）、正しくないと思われる外見（「仕上げがきたない」）、不潔さ（「皿がきたない」「部屋がきたない」）などに用いられる。学者からすればこれらは違うジャンルの問題である。形態の美醜の判断は美学の領域だが、行為の善悪の判断は倫理学だし、清潔か不潔かは衛生学、そして清潔感もたらず気持ちよさは心理学の不快の問題である。けれども一般の人々がこれらに対して同じ言葉を使って不自然に感じないとすれば、それにはたぶん理由があるのだ。さらに興味深いのは英語の *fair* と *ugly* もやはり視覚的美醜と道徳的正不正の両方を表すことである。どうやら私たちが無意識に働かせているこのものさしの汎用性には、国境を越えた必然性があるようだ。しかも「きれい」という判断は、頭でいろいろ考えた上の結論というより、生理的反応のようにほとんど反射的に生じるものである。おそらく私たちが「きれい」とか「きたない」と言うときには、対象が人の行為であれ事物であれ、味の好き嫌いに似た身体反応が私たちの内部に起こっているのだろう。さ

らに私たちは「きれい」「きたない」の他にも似たような基準をいくつか持っていて、日常生活で使っている。近年の「かっこいい」とか「かわいい」というのもそうだ。これらの基準を世間の人には「美学」と呼んでしまったのではないだろうか。

私たちは、生きていくための判断基準として道徳（善悪）や合理性（真偽・正誤）を必要としてきた。そしてもう一つ同じように必要としてきたものがある。それは近代以降の日本でしばしば「美学」と呼ばれてきたものだ。もし歴史的に用いられてきた学術用語としての「美学」に代えて、世間の実際の用法に合わせてもう一つの「美学」を考えるとしたら、それはどのようなものになるだろうか。それは「生き方のスタイル」や「生活の中のデザイン」について、私たちがなぜ美的判断を必要としたのか、またどのように美的判断を行ってきたかについての研究となるだろう。その内実は時代により、地域により異なるとしても、たぶん日本だけの現象ではない。一九世紀の英仏で「ダンディズム」と呼ばれたもの、中国や日本で「風流」と呼ばれたもの、そして今日世界の若者たちが「クール」と呼んでいるものも、そのような意味で「美学」の一形態であるだろう。ではこのもう一つの「美学」は何を研究すればよいのだろうか。思いつくままに問題の事例をあげてみよう。

私たちは来客があるとわかるとなぜ部屋を片づけるのだろうか。さらに花まで飾ったりするのは何のためだろうか。

料理をおいしく作ろうとするだけでなく、なぜ高価な食器を買ったり、食べられない葉っぱを盛

りつけたりするのか。

贈り物をするとき、よい物を選ぶとか、心のこもったメッセージをつけようというのはわかるが、なぜ捨ててしまう包装にまでこだわるのか。

なぜファッション売り場がデパートで最大の面積を占めるのか。

なぜ学生や父兄に余計な出費をさせがちな入学式とか卒業式とかが必要なのか。なぜオリンピックは莫大な経費をかけて開会式をやるのか。なぜ経済的に余裕のある人は豪華な結婚式をやるのか。

「おしゃれ」とはなにか。「センス」とはなにか。「流行」とはなにか。

経済的損得を優先する人を「金にきたない」と軽蔑し、公正さを優先する人を「きれい」と尊敬するのはなぜか。物語の主人公としては利己的な人よりも自己の利益を（場合によっては命さえ）かえりみない人に共感が集まるのはなぜか。自分はそんなふうにはなれないのに。

犯罪者（盗賊とかやくざとかテロリストなど）を主人公にした映画が無数にあり、しかも観客がそれらを「カッコいい」と称賛し、続編が作られるほど人気が出たりするのはなぜか。

なぜ「カッコいい」が賛辞となるのに、「カッコつける」と笑われるのか。

たぶん人が他人を見るときには、そこに「生き方の美学」を探る視線があって、ひとびとは「美学」に従う生き方を見るときつい評価してしまうのだろう。ちょうど自然を見るときに美を探る視線があり、美しい景色を評価するように。同じようにある人の生活のために選ばれた事物、室内空間

とか衣服とか食器などのデザインもまた、その人の生活の「美学」の現れとして評価されるのだろう。

これら「生き方のスタイル」や「生活の中のデザイン」の問題に答えるものが「生き方と生活の美学」、あるいは「生きるための美学」である。本書はこのもう一つの「美学」を探るために第一歩を踏み出そうという試みである。もちろん最初からそのすべてに答えることはできないので、問題の範囲を区切りたい。それは日本の古代（『万葉集』の時代）から江戸末期までの、「生き方のスタイル」と「生活の中のデザイン」である。さいわい日本人はその時代ごとにこの「美学」を表す言葉を持っていた。「風流」「みやび」「数寄」「婆娑羅」「わび」「すい」「いき」などだ。これらはある種の生き方を表すと同時に、物品やその使用法の美的な特性を表す言葉であった。本書はこれらの言葉が何を意味していたのかを調べることを通して、過去の日本人の「美学」を解きほぐしてゆきたい。